

天啓としての民衆芸術

奥村家造

Whitman was modern though
without culture or learning.
— Zukofsky —

ジョン・アディントン・シモンズ (John Addington Symonds, 1840-1893.) の英文学史上の位置付けは如何であろうか。例えば『オクスフォード・英文学必携』(改訂4版)、シモンズの項には型通りの記事があり、学歴、代表的業績などが列記されている。彼に続く異綴同名の二人には、それぞれ biographer and dilettante, poet and critic とその人物の専門又は得意の領域を示す呼称が与えられている。シモンズにはそれが無く、辛うじて文末に「翻訳者として勝れ……」の一筆が加えられている。エヴァンズ『英文学小史』にはその影すら留めていない。つまり、わがシモンズは何者とも決めかねる存在と言うことに落着くのであろう。身心共に宿痾に呻吟し続けた生涯であったが、11年がかりで書きあげた大著『イタリア・ルネサンス史』(全7巻)を世に送り、チェルリーニその他イタリア語からの翻訳、ミケランジェロやカンパネラらのソネット、ギリシア詩華集などを残している。勿論、文芸評論の領域にもいくつかの著作がある。

Essays Speculative and Suggestive, in two volumes, the edition of 1890, London. First AMS EDITION published 1970, N. Y.

In the Key of Blue and Other Prose Essays, the edition of 1893, London. First AMS EDITION published 1970, N. Y.

Shakspeare's Predecessors in the English Drama, Smith, Elder, & Co., London, 1900.

A Problem in Greek Ethics, Haskell House Publishers Ltd., 1901.

この中、第一冊目は内容の上から「文芸随想」とでも言うべきもので、その第二巻に、「民衆芸術——特にウォルト・ホイットマンに因んで——」(Democratic Art. With Special Reference to Walt Whitman, pp. 30-77.) が収められている。ホイットマンと同時代、年齢に20歳の差はあっても没年は一年違いと言うシモンズの苦心作であるから、評価の是非はともかく、ホイットマン研究上、一顧の価値は有るであろう。多少、我田引水の譏りは免れ得ぬとしても、シモンズにおけ

るホイットマン体験は異様とも思えるほどに強烈、持続的であるように思われる。その経緯の一部をシモンズのホイットマン論を手がかりに、少しずつ解明して行くことにしよう。

「民衆芸術」の構想がシモンズの脳裡を掠めたのは1887年半ば頃であった。7月中旬、避暑を兼ねたダヴォスでの生活が始まり、シモンズは体調も上々、チェルリーニの自叙伝の翻訳に没頭、傍ら、評論集『文芸随想』上梓の準備も始めていた（Horatio F. Brown, *John Addington Symonds, A Biography*, Compiled from his Papers and Correspondence, Second Edition, Smith, Elder, & Co., London, 1903.）。因みに、この『ジョン・アディントン・シモンズ伝』の編著者ホレイショ・ロバート・フォビス（Brown, Horatio Robert Forbes, 1854-1926.）はイギリスの歴史家で「ヴェニス史」の著者。『シモンズ伝』初版は1895年。ブラウンは、又、シモンズの著述関係の遺言執行人でもある。そのブラウンに宛てた書翰に次の件がある（*op. cit.*, p. 424., To H. Brown. Davos, July 31, 1887.）。

芸術及び批評原理試論を書き始めました。写実表現と典型表現、モデル論、美・構図・表現・個性、芸術及び文学への進化的理論の適用について、この4篇は、すでに、書き上げました。今念頭に有るのは、風景論と民衆芸術に関する短篇です。民衆芸術では、ホイットマンによって開示された未来の芸術に向う方途を何としてでも探し当てる所存です。



J. A. シモンズ (1840—1893)
〔写真左下隅に注意。「J. A. S. 1889, W. W. へ」とあり、シモンズからホイットマンへ贈られたもの。〕

一般に、ホイットマンの『草の葉』がイギリスやヨーロッパへ伝播し、その地へ受容されるのは、1867年に改訂4版が公刊された翌年、美術評論家ウィリアム・マイケル・ロセティ（William Michael Rosseti, 1829-1919.）が国外向きに『ホイットマン詩集』を編集、出版してからだと言われている。『草の葉』が初版以来、例えば、イギリスのシモンズの許へ、直接間接に、その紹介、論評が、しきりに寄せられ、文芸界で、話題になり出したのは1860年代半ば迎りのようである。当時は未だ文芸雑誌が貴重な情報源であり、入手も今日ほどに容易ではなかったらしい。シモンズは友人に *Fortnightly Review* 誌の借用を頼んでいる。「コンウェイがホイットマンについて書いている記事の載っているフォトナイトトリイ・レビューを持っているなら、貸して下さい。11月号だと思ふ。直ぐ頼むよ。君の手許に有るといいのだが。探して無ければ、その号数を知らせて下さい。買ってでもいいから。そうすれば申し分無しだ」（*Ls. 1. p. 684.*）。号数11月号はシモンズの思い違いで、正確には、1866年10月15日号である。熟れにせよ、20歳代のシモンズにとって『草の葉』との出会いは絶大な意味を持っていた。「ウォルト・ホイットマンについて物を書こうとすることは、とても難しいことが判った。書くことが絶無に等しいからと言うのではない。言うことが有り過ぎるからである。25歳の時に初めて読んだ『草の葉』は、聖書以外、如何なる書物も及ばぬ程大きな感化を与えてくれた。プラトンもゲーテも叶うどころではない。斯くも深く五臓六腑の隅々まで行き渡っているものについて、^{あげつら}論うことはできない。ウォルト・ホイットマンは、私を助け、民主体制、科学そして人類愛と、凡ゆる真の科学的宇宙

観に具わっている精神性に依って、現代世界が導かれ行く、かの大いなる宗教との調和を理解させてくれる」（*Ls. III*, p. 386.）。友人ホラス・トロップェルにシモンズがこのように洩らしたのは1889年9月3日のことであった。シモンズ49歳、人の目には円熟の時代であった。ホイットマンとの格闘も四半世紀に垂々としていた。

シモンズにとってホイットマンは未来芸術の行手を照らす灯台であった。『草の葉』の存在と意味は聖書にも並ぶものであった。すでに、この詩集との出会いはシモンズの胸奥に一種の宗教感情をも呼び覚ましていた。しかしそれは単にシモンズの個人的な情動ではなくて、19世紀ヨーロッパ全体を覆う宗教的動向と、それに伴う底知れぬ不安にさらされた人間の姿でもあった。「誰もが、屢々、神信仰（私が神と言っているのは、キリスト教の言う人格として生き生きと感じられる神のことだが）を剥ぎ取られているのは、現代に生きる人間の不幸か欠点であろうか。神らしき御方がこの世に命を授けて下さっていることに疑念を抱いているものなど、実際にいる筈がない。『如何なる神の在ませるや定かならねど、神ここに在す』“*Quis Deus incertum : est Deus*”。私には常日頃私に係わっている生ける神は在まらず、永遠の館に住う父、未来の主、友、師、熟れも一人とてありませぬ。このような不信が、時には、光明や殉教の形で現われることがあります。かかる苦悩に嘖まれ乍ら、一種の禁欲的神秘主義に身を寄せています。ギリシアの哲人クレアンゼスの祈り、ゲーテの『ファウスト』の一句、それに粗笨に近いホイットマンの樂觀的態度などがそれです。私は声を荒げ宇宙に喚ぼう、仮令、汝我を危めることあらんも、なほ我汝に抛り頼まん」、27歳のシモンズは綿々と自己の苦衷を妻に明かしている（*Ls. I*, pp. 723-724.）。余談ながら前述のクレアンゼスは前四世紀ギリシアのストア派に属する哲学者であるが、シモンズの心の抛りどころとなった章句が讚美の歌として、彼の手で英語に訳されている。彼自身のみならず、19世紀中葉のヨーロッパの精神文化を辿る縁ともなろう。

神、掟、理、生よ我を導き給え
 汝を呼びし名並べて空しく洞ろ。
 我を導き給え、争うことなく従い行く
 心にしあれば、
 争いしとて、猶只管従い行かんのみ。

（*op. cit.*, p. 725n.）

「全・善・美に／断乎生きん」、このゲーテの対句には、いささか辟易気味だが、当時のシモンズには、やはり、なくてはならぬ心の糧であった。禁欲的、生一本の青年文学者には、奔放、洒脱の人ホイットマンが天真爛漫の樂觀論者に映ったとしても不思議ではなかった。前便から僅か4日後（1867年6月9日付）シモンズはやはり妻宛に短い書翰を認めている。ホイットマンについて言えば前言の断定を補正する意味合いの内容である。例によって書物が手がかりになる。「私が『神曲』に親しむ真意が君に判ってもらえるといいのだが」とシモンズは切り出す。「自然は、さらに、活力に溢れている。だが君は、必ずしも、自然の授けてくれる慰藉に抛り頼んでいる訳ではない。以前言ったことの繰返しになるが、自然が益々大きくなり、芸術が少しずつ萎んで行く。ホイットマンが私の心に及ぼす感化の秘密はこの点に有る。芸術を理解するには努力が必要

だと言う君の真意が今一つよく判らない。偉大なるものは凡人の共感と知性を求めている」（*op. cit.*, p. 726.）。僅か4日後れに続く二信だけ見てもシモンズのホイットマンに対する態度が微妙に変化していることがはっきり判る。『草の葉』改訂増補四版（1867年）が或はシモンズの眼にとまったこともあったのかも知れない。ホイットマン効果の秘密を愛妻に洩らす位だから、シモンズの心中ではホイットマンの精髓に触れ得た位の自信が芽生え始めたのかも知れない。「私（シモンズ）はこれまで自己確立の道を歩んで来た。その途上でウォルト・ホイットマンの著作に出会った。『草の葉』を談じる段になると決って大袈裟な口吻になって了っている。ホイットマンが宇宙に寄せる激しい情感、人生の凡ゆる面に現れた生きることの素晴らしさを把む鋭敏な感性、豪放な気分、例えば果しなく打ち寄せる大波に身を任せたくて堪り兼ねる気分、等々思い合せると、ホイットマンにしてみれば、沈もうと浮かぼうと御満悦で、自分は沈む筈もなければ、つまるところ失うものなど何一つ無いと、その場は、自信満々なのである。現世に対する具体的で情熱的な信念は、人間の多様な経験、彼が人間に寄せる共感、それに身震いを憶えるような愛と友情が一つに成って、私の思弁省察の折々に、潺々と流れる生氣に満ちた力を送ってくれたのである」（Brown, *op. cit.*, pp. 323-325.）。「端的に言えば、大宇宙に寄せる私の情熱に、確信、勇氣、自恃を添えてくれたのはホイットマンであった。それ以上に、人間の情熱の為し得ぬこと、同胞たちと交わることの価値を彼は教えてくれた。——同胞たちがあればこそ、彼等を好きになり、彼らから学び、彼らに教えてあげ、助けたり助けられたりもできる——お互いに思惑など一片も持ち合せている訳ではない。私の追い求めていた宇宙の成員になることの真意を、私は、ホイットマンを介して体得した」（*ibid.*）。

『シモンズ書翰集』（*The Letters of John Addington Symonds*, 3 vols., edited by Herbert M. Schueller & Robert L. Peters, Wayne State University Press, Detroit, 1967.）にはホイットマン宛書翰が11通収められている。第一信は1871年10月7日付（771）、最後は1890年9月5日付（1822）で終っている。少し注意してみると、前書の書出しに明らかな変化が見られる。1889年1月29日付（1692）まで、極く平凡に、Dear Mr Whitmanと始まっていたのが、1889年12月9日付（1761）からの3通に限って、Dear and honoured Friend and Master, My dear Masterなどと書かれている。尤も1761信はホイットマンにとって最後の豪華出版となった *The Complete Poems and Prose of Walt Whitman, 1855-1888* がシモンズにも贈呈されたことに対する礼状をも兼ねた手紙であるから、シモンズも自ら多少大形に構えた節もあったのであろう。六百部限定、著者署名入りとあってはシモンズの悦びも一入のものがあつた。「御高著を御恵贈賜り心よりお礼申し上げます。詩と散文から成る、あのように見事な全集を私は『ホイットマン聖書』と呼ぶことにします。／しかし、私の心には頭を働かせ、手を動かす力もなくなり、満腔の謝意をお伝えすることが出来ません。あなたの使徒11人の中に、あなたから彼らの得たもの、彼等があなたに負っているもの、彼等に対するあなたの存在意義などを世に伝え得る人は一人として有りませぬ」（*Ls. III*, p. 424.）。これより4日前のブラウン宛書翰（1889年12月5日付）にも a sort Bible なる評言が使われている。余談乍ら興味深いのは、ホイットマンの署名を見てシモンズが「震える手付きで」と指摘している点である。親友トロウベルの助力を得て畢生の大業を終えた年、ホイットマンは脳溢血の発作に襲われたのであつた。

Master とはシモンズにとって戯言でも追従でもなかつた。イエスにも擬さるべき、先導、尊

師、それに応じき人ホイトマンに捧げられる呼称であった。不敬、僭越に目もくれず、シモンズは、聖書と使徒をも舞台に乗せる。未だ見ぬ師ホイトマンへのシモンズの思いは募るばかり、その逸る気持が肥大の極に達し、その表現が行きつく処まで行き果てたのである。19世紀ヨーロッパの精神文化が新しい行手を求めて胎動している時、シモンズの心中では、それに逆対応する歴史の様相が映し出され、ホイトマンとの出会いを機縁にして、ひそかに、その形を整えようとしていた。シモンズのホイトマン像から洩れる光が仄かに照らし出した新しき芸術の行く手はこうであった。

明日からの芸術の勤めは、自然と人間には神聖なるものが内在していることを明らかに示すことである。そうしている中に——芸術そのものの美の追究を押し進め、人の道を説いたり説教したりせず、事物の陰に隠れ給う神を見付けては、その御姿を表に出している中に、芸術は、あらためて、人類の抱えている永遠の精神的糧を恵み与えてくれるであろう。これでこそ、民衆芸術である。父なる神の王国は過ぎ去って了った。御子の王国が過ぎ行こうとしている。霊の王国が始まる。(77)

引用中の「民衆芸術」は Democratic Art の訳語である。一般の慣用に従ってはみたものの、シモンズの意図を満たしていると言える訳語ではなさそうである。では、一体、シモンズはデモクラティック・アートの下に如何なる意味を含ませていたのであろうか。その最短の手がかりの一つは、シモンズの付した副題「特にウオルト・ホイトマンに因んで」にある。前掲の引用は「民衆芸術論」の結びであるが、その原形とも読める表現が『草の葉』初版序文に有る。「やがて牧師は姿を消すことであろう。彼らの任務は終わったのだ。新しい聖職者たちの一団が登場して、人間を導く師となるだろう。そしてすべての人間が、それぞれ自分自身の師となるだろう。彼らは、過去と未来の表徴にほかならぬ現代のさまざまな具象物に靈感を見出して、永遠の生や神、物の完成、自由、あるいは魂の絶妙な美しさと真実性などについては、いまさら敢て弁じたてることはしないだろう。彼らはアメリカを舞台に登場して、地球上のいたるところから湧き起る歓迎の声に迎えられることだろう」（『草の葉』(上), L. G., pp. 470-471.）。勿論これでデモクラティック・アートの委細がつくされた訳では無い。ホイトマンとシモンズは共鳴し合っているのだから、少くとも、対立の有りようはない。自らの立つ境涯の違いからか、現前の時代が、この二人の胸中に落す影に、心なしか、ずれが認められる。それを正し、判定するのは現代だとホイトマンは言う。

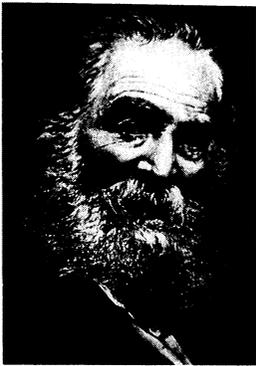
最大の詩人になると目される人物の直接の試金石は現代である。もしもその人物が、広大な大海原の潮流を浴びるように、現前の時代の波におのれの全身をひたすことがなければ——もしも彼自身が現代の化身ではなく、あらゆる時代と場所と過程と、そしてあらゆる生物無生物とに類似の相貌を与え、それ自身は時間を制するものでありながら、考えも及ばぬほどに茫漠たる限りないその故郷から、現代を浮遊するさまざまな姿に変じて浮び上り、この人生の柔軟な錨いかりにつながれ支えられて、現在というこの時点を過去から未来への道程とし、このひとときの波と、その波に浮かぶ60人の美しい子供たちのひとりひとりを描き出す

ことに専念する——このような永遠というものの姿が、もしもその人物の目に見えていなければ、彼はいぜん凡人のひとりにすぎず、そこからぬき出るのはまだまだなのである。

（前掲書、33頁、L. G., pp. 469-470.）

シモンズの民衆芸術論「デモクラティック・アート」をさらにもう少し詳しく検討してみよう。ここでは紙数の関係もあり、民衆芸術論をシモンズの文学論の中に位置付け、その意味と方向を論ずることは出来ないので、当面の便法として、可能な限り、「デモクラティック・アート」の内容を具体的に紹介し、時に応じて、ホイットマンとの関連を辿ることにする。具体的な手続きとしては、デモクラティック・アートに対するシモンズの結論を、先ず、提示して、その後、その断案に至るまでの過程を、最初から、逐次辿って行くことにする。

二



W. ホイットマン
（1819—1892）
（1871年頃の写真を下地に
W. J. リントンの手になる
銅版画。）

Democratic Art, Democracy の二語は40ページのシモンズの論文に各ページで姿を見せると言ってもよい。この二語にシモンズがどれほど強い関心を寄せていたかの尺度とも考えられるが、同時に、この二語が一体どのような形でホイットマンとシモンズを結び付けているかを解明するための大切な手がかりとなるかも知れない。シモンズは19世紀ヨーロッパのおかれている文学の状況の中で、デモクラティック・アートの占める位置と意義を、ホイットマンとの関連で提唱したのではあったが、その結びは、必ずしも、快刀乱麻とは言えず、当時のヨーロッパにおける一般思潮の趨勢に併呑されても不思議でないものとなった。従ってデモクラティック・アートの提唱に対して、その瑕瑾、無意味を詰る声が挙ったこともあったが、それはホイットマンの真意を解していないとしてシモンズは、一旦、反論を退けつつも、デモクラティック・アートの真意を定義するための

消極的要素として認め論弁を続ける。

素朴美の復権 朴訥そのものの人たちや日常茶飯の事物の中に美を見つける能力は、その名に値するほどの詩人芸術家には、すべて、当然のものであることは言うまでもない。しかし、この能力は、今私たちのいる時代では、極めて異^{ちが}った遣り方で、しかも、とても違った真剣な気持で行使されなくてはならぬことになっている。

韻文や散文で歌われたギリシア田園詩、或いは、田園生活を素地にしたラテン教訓詩を考究していると、謙遜の気配、剥^むき出しの事実を避けようとする細やかな心遣い、洗練された感覚にびったり合った事柄を細部に亘り懸命に選り分ける作業、などに気付く。朴訥なものが、^{わざ}態と、威張っている。或いは、姿を変えている。ギリシア・ラテンの人間は優雅にまで^{おとし}貶められ、風景はアルカディアの文学理想に則^{したが}って描かれている。この描写法は真理を^{いんべい}隠蔽し、虚偽を督促する

ことを意味する。朴訥、満足そして勤勉と言う構想上の諸美德を高め乍ら、ギリシア・ラテンの田園詩・教訓詩人たちはその詩のモデルを慰み物さぐきにしている。このギリシア・ラテンの不誠実から私たちは現代田園詩と言う容認することのできぬ紛まがいものを引き出した。民衆芸術が要求しているものは、農民の生活を、その在るがままの姿で、知的に表現したものである。ゾラが『大地』で描いているような歪められた姿を求めているのではない。小説『大地』では細々と醜悪の上もないものが、すべて、抜き出され、団塊を成している。しかし、人間の美醜、情熱と忍耐、格闘と達成、土を耕す農夫たちに見られる優れた、しかも貪欲な行為能力、等々の根源的特性を明らかに示すような点も認められる。詩人も芸術家も手のこんだ変装を施して自分の主題を小奇麗に飾り立てたり、或いは、残忍なものだけを抉り出して作品を下卑たものにした誘惑しりぞは退けなくてはならぬ。人生には、それなりの悲劇、品位、苦悩、罪、高慢、高貴、それに野卑までが詰っているに違いないと思っている以上、詩人芸術家は、常々、自分の扱っている人生の場面からその特性を引出すだけの心づもりが出来ていなくてはならぬ。農夫の持っている豆の莢殻さやからにも王子様の鞞さやと同じ位に本当の美しさがふんだんに有ることを詩人芸術家は見直さなくてはならぬ——何しろ、小豆色あづきのぶなの実は、ざくろのつやつやした赤い皮に決して引けを取らぬ程に、随分美しいものだから。農具一式、収穫する人や乳絞り女の服装、農夫たちの歩いている森や野良の道、農家を照らす光、それに質素な家の中、それらの事物が愛しさの特異な雰囲気いとわを醸し出す。そして、そのことがヴェルサーユやヴィラ・デステの立派な建物、堂々としたテラス、それに美事な衣装への想いを募らせる。

オランダ絵画に見られるのは今問題になっている型の真種、本物ではあるが、偏狭な作品である。謙遜な気配は少しも無く、事実を忌避している訳でもなく、細部を選んで洗練された趣味に取入ろうとしているのでもない。低俗な感覚的喜びが共鳴を呼ぶかに思われ、その作品を見ている人たちに美的な喜びを与える。莢殻の美しさは、まあこんなものだろうが、大いに受けがいい。光と影、色彩の開発、世帯道具の製作、工場や職業の図解に優しい心遣いが為されて来た。しかしその結果は非精神的なものである。詩は、大抵が、居酒屋の詩である。民衆芸術はこれ以上のものを望んでいる。ユーモアを求め、滑稽、民衆からの感覚的示唆を待受けている。諧謔に耽ってきた Hogarth とその仲間の画家たちは私たちを長く待たせるには及ばない。「懶惰な弟子」において、Hogarth は、「当世風の結婚」と同じように社会悪を曝露した。その筆運びえんごひいきに依怙こは無かった。その限り彼は民主体制的と評されて然るべきである。しかし紛まがい無き民衆芸術の気配、それに応しい民衆の捉え方、大衆理想の創造、階級差別を離れた人生の愛しさや品位の立証、一定の技巧や職業と切り離すことのできぬ美の発見、常民の中に神々しいものを看得すること、それらのことを Hogarth ならびにその一派には望むべくもない。皮肉屋として Hogarth 一派が、主おもに、私たちに教えてくれることは、王宮に住もうと荒ら屋あばで暮そうと人間、同じように、悪わるになれると言うことである。

イギリスの詩人ジョージ・クラブには底光りのするものが多く見られる。クラブだけは決していか厳ついでところもなく、殺風景な生活苦に打ちのめされたところも目立たないとして話。クラブは民主体制への共鳴を感じさせる。しかしいろいろと周囲の事情も有って、狂喜して民主体制へと昇りつめることは出来なかった。さらに、ここイギリスにはワーズワスもいる。イギリスにおける民衆芸術の草分けとも言える彼は民衆芸術の正鵠せいこくを射ることが出来なかった。ワーズワスは

民衆芸術に対して有り余るほどの気持を持合せてはいたが、謙遜な態度の邪魔立てをすることが多過ぎたのである。彼の作品には一貫して、主題に対する無関心が影を落している。そして、それを道徳的目的に利用しようとする傾向がある。貴族制の下に生を享け、ワーズワスは民衆に教えを説き、これ見よがしに民衆から教訓を引き出し、自分がその教訓を学ぼうとしていることを、押し付けがましく、見せびらかそうとする。ワーズワスには腹臓の無い交友や心からの信頼は殆んど無い。独りよがりの、沓えぬ遣り方で自分の認めた人たちや勢力と間接的な交わりを保っている場合が極めて多い。

エリザベス朝時代の詩が民衆的かどうか、考察を躊躇うだけの価値は無に等しい。この時代の文学全体が王権封建的思想の感化を受けて産れたもので、それだけに民主体制が取って代る一つの秩序を示している。燃えるような愛国の熱情にこの時代の真の偉大さが在る。しかしエリザベス朝のイギリスは今だに明確な階級制度と見做されている。君主、教会貴族、世俗的貴族、聖職者、無階貴族、幾つかの階層に分れた法曹界の人たち、郷土、商人、職人、それに農民が社会を構成している。各階級には、それぞれの義務、特権が有り、イギリス連邦共和国で保証されている不易の地位と言う感覚から湧いて来る、あの自尊心を誇りにしている。それ故、雄々しさ、自由、エリザベス朝時代の詩を楽しむことの中に真の民主的なものは微塵も無い。ヘイウドやデカーの写実的な戯曲でも、日常生活の美しさや民衆の美德をものの美事に描いているのに、民主的ではない。「シェイクスピアは、文学における、妥協を許さぬ封建的態度の権化だ」とホイットマンの言っているのは尤なことである。シェイクスピアの生時に、彼が生き生きと描いている封建制が、事実上、過去のものになって了っていたと言う事実をもってしても、ホイットマンのこの指摘は微動だにしない。封建制の活力と実効はバラ戦争の間に減衰したのである。しかし時の有為転変が、徐々に、大英帝国に訪れている。シェイクスピアが劇作家として世に出て以来300年、封建国家からイギリス精神を追放することは果されていない。社会は凡ゆるものが変化していると言うのに、イギリス人は依然として紳士気取り、階級的の偏見を抱き、貴族を崇拜し、次元の低い与太話に現をぬかしている。

これまで述べてきたことは事実なのだから、英文学や芸術の中で、これこそ民衆的だと太鼓判を押せるものを見付けるのは生易しいことではない。イギリス以外のヨーロッパ諸国は、傾いてはいるが、いまだに衰えぬ封建制の微動だにせぬ一般的様相を示している。民主体制が実際に達成されているスイスは芸術を創造する天才を産み出しては来なかった。

ここでシモンズはデモクラティック・アートの特性を消極的に、いくつか、文学批評の形を借りて列挙している。それはギリシア・ローマから19世紀にまで及んでいる。ギリシア田園詩、ラテン教訓詩には、謙遜の気配、剥き出しの事実を避けようとする細やかな心遣いなどが見られ、洗練、優雅と言えは通りはいいが、それを裏返せば、朴訥なもの、態と、威張っているだけのことである。だから、ギリシア・ラテンの田園詩人、教訓詩人たちは、自分たちの詩のモデルを慰み物にしていると極言する。その伝で行けば現代田園詩に至っては、容認することのできぬ紛いものになって了う。それでは真理を隠蔽し虚偽を督促することになる。これに対しデモクラティック・アートは、農民の生活を、その在るがままの姿で、知的に表現することを求める。その具体的な目標は、大衆理想の創造、階級差別を離れた人生の愛しさや品位の立証、一定の技巧や職業と切り離すことのできぬ美の発見、常民の中に神々しいものを看得すること、等々におかれ

る。イギリス画壇を外国芸術の束縛から解き放ち、18世紀イギリスで最も人気のあったウィリアム・ホガース（Hogarth, William, 1697-1764.）でも、その筆致に見るべきものはあったが、要するに、王宮に住もうと荒ら屋で暮そうと人間同じように悪になると教えてくれるだけのことで、デモクラティック・アートにはほど遠い。

イギリス詩壇はどうか。甘ったるい幻想を抜きにして、酷薄無情の田園生活を歌ったジョージ・クラブ（George Crabbe, 1754-1832.）は、終ぞ、デモクラティック・アートの正鵠を射ることは出来ず、一介の写実派詩人に終わった。イギリス・ロマン派の雄、ウィリアム・ワーズワス（William Wordsworth, 1770-1850.）は、若くして人類愛の高邁なる希望に燃え、ルソーの教理と自らの体験から性善説を確信していたと言われる。「ワーズワスは1850年に他界したが、詩は1815年頃彼の胸奥で死滅した」とエヴァンズは断ずる。イギリスにおけるデモクラティック・アートの草分けと歌われながら、その精髓に達することが出来なかったのは何故か。ワーズワスはデモクラティック・アートに過剰とも言えるほどの気持を持ち合せていたが、かえってそのことが仇となり、謙遜な態度を失わせることになった。ワーズワスの作品には一貫して、主題に対する無関心が影を落している。そしてそれを道徳的目的に利用しようとする傾向がある。彼は民衆に教えを説き、これ見よがしに民衆から教訓を引き出し、自分がその教訓を学ぼうとしていることを、押し付けがましく、見せびらかそうとする。

シモンズの論断は苛酷なほどに倫理的色彩の濃いものになっている。では、その論拠となっている歴史的背景はどのようなものであったのだろうか。彼自身はそれを立論の第一条件と呼んでいる。勿論、彼の目撃している視線の彼方にはウォルト・ホイットマンが和やかに佇み、デモクラティック・アートの背光が眩しく映えていたであろう。それだけに、デモクラティック・アートの源流を探り、冷静に自己の感懐を披露することはシモンズにとって一つの使命とも思われた。

古典主義・浪漫主義の彼方に 19世紀前半、古典主義と浪漫主義が、それぞれの利害得失を掲げてはげしく舌鋒を交した。ルネサンス以来ヨーロッパに蔓延していた趣味の原則に反旗を翻したのは浪漫主義であったが、この運動は、摂りようによっては、写実主義が理想主義に反乱を起したのと類似したところがある。事の起りは、自由で自発的な芸術の形態を願い求めるところに有る。品位の有る感情、伝統的な言葉遣い、それに英雄的行為に関する公認の原則には、何か底知れぬ欺瞞的なものが宿っていると言う確信から浪漫派の叛逆は始まる。浪漫派と言われる、詩人、小説家それに画家たちまでが陳腐な、如何にも尤もらしいスタイルに自分たちの憎悪を剥き出しにしたのである。浪漫派の芸術家たちは、従来無視されてきた中世の傑作に芸術的着想を探り、人間の生き方、本性に具わる、穢れを知らぬ姿態に悦びを憶えた。均斉と調和が不安定な支離滅裂に席を譲ることになった。オリンポスの宗廟には魑魅魍魎が住み付き、野蛮で不健全な小説の中心主題をなしているのは、殺人、強姦、自殺、恋に疲れた若い男女に見られる生への嫌意である。発作と歪みの時代なのだ。

同時に、徹底した趣味と判断の解放が生れた。初期の浪漫派の人たちが戦って勝ち取った、あの自由が転り込んできたのである。新しい表現法や芸術美の新しい規準がどんどん産まれる。中途半端で中味の無い紛いものの古典がすっかり影をひそめ、その代り、浪漫主義にも術学的な点が無きにしもあらずと言うことが明らかになってきた。このような浪漫主義の産んだ主たる成果

は、人類の歴史や人生の中に詩にならなかつたり、芸術的表現に不向きな主題は無く、久遠の自然界にも、詩的で無く、芸術的に扱うことのできないようなものは一つとして存在しないことを明らかにしたことである。それと同時に、芸術の素材を扱う凡ゆる方法、それを把握し表現する凡ゆる手立ても当然存在しなくてはならぬ。擦った揉んだした揚句、批評がやっとの思いで主張したことは、スタイルは当該芸術家の提示した目的を実現していなくてはならぬ、技量は頼もしく、名工は真摯実直、その作品たるや自らの真意に叶って余り有るものでなくてはならぬと言うことであった。

以上のことは、それだけで、大きな収穫であった。しかし、それだけで事が済むなら、将来の見込みに弾みが付いたことにはならぬであろう。その名称からも判る通り、古典主義も浪漫主義も芸術問題を考える過程でひょっこり出て来たもので、自発的な方法ではない。現代の古典派は資料に手を加え、学術研究に依ってギリシア・ローマから得られた規準を観察しているのである。浪漫派は封建制の産んだ文学と建築へ逆戻りしている。古典主義は、本質的に、貴族主義であり、浪漫主義は急進改革的である。しかし、浪漫主義はその着想を諸々の源泉から汲取る点では、決して貴族主義に劣るものではない。古典主義も浪漫主義も、19世紀のあの枢要現象、民衆の降臨に符合していないのであるから、双方共に、決め手を持合せていない。芸術並びに文芸の領域で古典主義と浪漫主義が口論を交わしている中に私たちが自然に到達した点は、民衆的とも言える斬新な発語様態が可能になったことである。古典派の人たちの欺瞞、浪漫派の人たちの発作、どちらも同じように廃棄されねばならぬ。紛いもののパルナソスの丘であろうと、ボール紙作りのプロケン山であろうと、19世紀の詩人たちは、今や、信仰する訳には行かぬ。芸術家は、日中の自然光に照らされて、漫然と、歩いている。過去の教えてくれることを軽蔑することなく、現在の提示しているものを拒絶することもなく、芸術家は、こよなく美しいと見たものを表現し、外なる世界、中なる世界の両界へ闖入することを目指す。若し芸術家が心から情熱を動かされ、精一杯良心的に努力しているなら、その間は安泰なのだから、彼の作品は立派な価値を持ったものになるであろう。彼がどんなスタイルを選んだか、どんな画題が彼の心を把えたかは、どうでもよいことなのである。

民衆の降臨 シモンズがデモクラティック・アート成立の歴史的条件を整備、要約している、その同じ内容をアイヴァ・エヴァンズは、決して短いは言えぬ一人の詩人の作品に凝縮している。「現代の読者が、人間としての苦悩に呻吟し、世事に手子^{てこず}摺りながら、かくも確かなる恩賞を携えて立ち戻れるような詩作品は数えるほどしか無い」（Sir Ifor Evans, *A Short History of English Literature*, p. 50, Penguin Books, 1966.）。かの *The Prelude* のことである。ワーズワスは深い道徳的資質に恵まれ、感情豊かな人であったが、持前の北の人らしい厳しさと自重していたと伝えられる。それ故、彼のことを、かなりひどい反動だと評する人も有る。この評価を全面的に信ずる訳にゆかないが、火の無いところに煙は立たぬ程度の真理はあろう。仮にワーズワスが改革に不信を示したとしたら、その理由の一つは、愛する英国、分けても英国の田園が意気盛んな産業主義の手にかかって破壊されることが心配だったからであろう。ワーズワスはフランス革命に人類解放を目指す大いなる歩みを見たが、若きボナパルトがこの人間解放のヴィジョンを掲げず、シャルマーニュの轍^{てつ}を踏もうとしていることに絶望した。パークの感化を受けていたワーズワスは

英国を新生フランス帝政に対抗する自由の砦と見做した。1803年対仏宣戦布告の折には、生涯最大の衝撃を受けたと告白したワーズワスであったが、早くも一年後には、攻守処を変えて、正反対の立場を主張しなくてはならなかった。幻滅と言うには余りにも深い懊悩の淵であった。シモンズの言う「発作と歪みの時代」の特質である。

単刀直入に言えば、芸術は、そのスタイルを選ぶのに自由であり、主題を選ぶのも自由である。そのような芸術は、浪漫派の急進改革と言う精神が治まると正気に立帰るが、その反動で、一つの高価な原理を取り戻す。その原理とは、自然の詩心を体得し、それを解釈できる心の持主に扱われるならば自然にせよ人間にせよ詩にならないようなものは何一つ無いと言うことである。

しかし乍ら、以上述べたことは、民衆芸術のほんの手始め、態度、機縁にすぎない。考察すべきゆゆしい問題が残っている。詩人並びに芸術家は、枢要な現代の課題と呼ばれている、あの民衆の降臨に如何に身を処すればいいのか。古典的、封建的芸術は、根っから、貴族的である。現代の古典主義及び浪漫主義も派生的な意味で貴族的なのである。浪漫主義は、実のところ、民衆の一定側面を突出させた。しかし苛立って、反逆心からそうしたのであって、謹厳な芸術ならば向後必ず責任を果さねばならぬ変革された政治的社会的条件について明解な知的判断が有つてのことではない。

斯る条件の下では民衆の為の芸術、民衆から生れた芸術が、仮に、文学も含めて、芸術が実在への自己の執心を緩めて、気前のいい俗物へ成り下るのでなければ、臆面も無く求められるであろう。

この期に至るまで、精神が躍動するように復活する前兆は僅かに数えるほどしかない。ヨーロッパのみならずアメリカでも文化は、依然として、大勢としては、再生し、模倣し続けられている。浪漫主義と古典主義との確執は趣味を解放した。それでも芸術家たちは古色蒼然たる手口で、未だに、ぼろぼろのテーマを手がけることを止めない。それでは、早期にテーマを把握することも出来ず、燃えるが如き確信を抱くことなく、普通の情熱が目覚めることすら識らぬ。

the advent of the people この句は、そのままに民衆の降臨と読むべきだと思う。少なくともシモンズの文脈では、目下のところそれ以外に考えられない。民衆の降臨は事実である。詩人、芸術家の、単なる自由への希求、運動のモトオではない。エリック・パートリチは **advent and arrival** の項で、特に前者について、特有の意味が内包されていることを指摘している。「**advent** には、深遠なる意義、如何ともし難い定め、自然の掟の業^{わざ}、などの含みがある」(Eric Partridge, *Usage and Abusage*, p. 19., Penguin Reference Books, 1963.)。それほどの意識がシモンズにあったかどうかは別にしても、詩人、芸術家の自由以上に、デモクラティック・アートの条件を整える以前に、行く手に立ちちはだかる、枢要な現代の課題に対する詩人、芸術家の態度決定を迫られていた。それが民衆の降臨なのである。このシモンズの課題指摘から二世代数十年後にオルテガの精緻な大衆の分析『大衆の叛逆』が刊行されたことを思えば、シモンズの立場も決して小さいものではない。殊に、先述の如く、到来、出現の意も含めて、**advent** の語を民衆、大衆に適用したことは、19世紀ヨーロッパにおける宗教の様相を把握する上でも極めて重要な意味をもっている。確かに、シモンズが、民衆の為の芸術、民衆から生れた芸術などの表現が不用意に用い

られることは、本来の芸術精神の稀釈、墮落に通ずる、と懸念を示している点は、そのままオルテガの主張にも通ずるところがある。

ホイットマンが19世紀60年代に、アメリカにとって基本的な必要物として要請したのは、「土着の作家・文学者の階級、そしてその階級についての明白な観念」であった。そして、その主張を次のように敷衍する。「今日、ゆったりと、大所高所から眺めて見ると、文明世界をすっぱり被っているヒューマンの課題は、社会的、宗教的なものである。従って、結局は、文学に行き着き、対処さるべきものである。聖職者は去り行き、聖なる文学者がやってくる。今日、これ以上に必要とされたものはなかった。しかも、ここアメリカで、求められているのは現代の詩人、でなければ現代の偉大な文学である。恐らくいつの時代にも、一国の中心課題、それによって一国そのものが真に左右され、そのために他のものを動かす課題とは、その国の国民文学である。特にその国の原型詩である。従来あらゆる国々にもまして、偉大で独創的な文学がその証となり、拠りどころになる（或る点ではアメリカ民主主義の唯一の拠りどころになる）」（L. G., p. 492.）。

『民主主義展望』（*Democratic Vistas*）は1870年に出版されているが、その中の二つの部分はそれより数年前に月刊文芸誌 *The Galaxy*（1866-78）に掲載されている。ホイットマンはこの雑誌の寄稿者の一人であった。先にシモンズの「デモクラティック・アート」の成立が1886年頃と推定したが、若しその推定が正しいとすれば、シモンズが『民主主義展望』に触れたのは文芸誌「銀河」の記事に拠ったことになる。従って、『民主主義展望』も、精々、一部分だけを読むことしか出来なかったことになる。熟れにしても、シモンズの「デモクラティック・アート」第3章以下に述べられたホイットマン論を詳細に検討すれば事態は少しずつ明らかになってくるであろう。

シモンズが、冒頭、「私はアメリカとデモクラシーの二語を転換可能な言葉として使うことになろう」（L. G., p. 490.）と言うホイットマンの言葉に共鳴しているところを見ると、シモンズの胸底には『草の葉』初版序文の余香が未だ漂っていたのかも知れない。彼は「デモクラティック・アート」第2章を次のように結んだ。「浪漫主義と古典主義との確執は趣味を解放した。それでも芸術家たちは古色蒼然たる手口で、未だに、ぼろぼろのテーマを手がけることを止めない。それでは、早期にテーマを把握することも出来ず、燃えるが如き確信を抱くことなく、普通の情熱が目覚めることすら識らぬ」。シモンズも詩と文学にどっかと腰を据えた牢固と沈滞を打破する気運の生れることを期待したのであった。その期待を一身に引受けたかに思われた現役の著者が一人だけいるとシモンズは胸を張る。ホイットマンである。彼こそは、その課題の緊急性と究極の意味を熟知した上で、その課題に到達した人に外ならぬ。ホイットマンは芸術を創造する秘訣として単純さにまさるものは無いと断言し、「大詩人とは個性的な文体の持主をいうのではなく、むしろ思想や物象を、ほんのわずかな増減すら加えずに、元のままの形で通過させる水路であり、自分自身を思いのままに通過させる水路なのである」とも定義している（『草の葉』(出), 22頁, L. G., p. 461.）。まるでスペインの哲学者オルテガの『現代の課題』で提示された「網の比喻」を先取りしたような口吻である。

デモクラティック・アート待望 ウォルト・ホイットマンの全生涯は、新しい国民文学の礎石を据えようとすることに捧げられてきた。ホイットマンが今行^やって見せていることに兔^とや角^{かく}思いを

巡らせて見たところで、ひとたびデモクラティック・アートなる課題を心に刻み込んだならば、彼の教説や実践を^{ないがし}蔑ろには出来ない。このような訳で、デモクラティック・アートについてホイットマンが直接間接に触れてきたことを検討してみよう。

短いが豊かな論説『民主主義展望』にはホイットマンの整然たる意見の精髓が詰っている。アメリカとデモクラシーの二語を使うのは、この二語が相互に転換できるからだ、著者の意図が、冒頭ではっきり述べられている。「アメリカ合衆国は、元来、華やかな封建主義の歴史を克服することになっている。それが出来ぬのなら、測り知れぬほどに大きな時の過誤を経験することになる」(L. G., p. 490.)とホイットマンは述べている。富と国力そして国の偉大を示す資源一切においてアメリカは急速に支配的地位に近付こうとしているのに、アメリカの身分証明とも言うべき近代理民主主義に見合うだけの文学が未だその姿を見せていない点をホイットマンは指摘している。「明らかに政治上の諸制度に逆行しているとは言え、封建制度、社会的身分制度、宗教上の為来り^{しきた}は、気持の上で本質的に、この国アメリカでも、最も重要な領域全体を、未だに、確りと把んで離さない。実に、教育の基底そのもの、社会的標準や文学の基底そのもの迄も把んでいる」。このような前提に立ってホイットマンは、一步踏み込んで次のように主張する。「民主政体が、自ら、揚げ足取りを止めたことを証明することができたとき、初めて、民主政体はその基礎を固め、それ自身の芸術形式、詩、学校、神学を華やかに開花させるのである。それらのものは、現に存在している一切のもの、過去にどこかで産み出されて来た一切のものに取って代り、従来と全く違った感化を及ぼすことになる」(L. G., p. 491.)。

アメリカと民主政体によって求められている芸術に対して、ここで、突きつけられている注文は過大なものであろう。それでもウォルト・ホイットマンは、この主題を論じている以上、それに精出さなくてはならぬ。ホイットマンについて語る時、ソロー (Thoreau, Henry David, 1817-62) は言ったものだ、「彼こそ民主政体なのだ」。だから、ホイットマンの言辞は、大胆不敵の極みだけれど、鋭敏な観察者としては勿論、力強い思想家の見解なのである。

旧世界では、ホイットマンの見解は部分的にのみ有効であると判ることがある。そのような見解が口にされたのは、アメリカ合衆国を訓育する狙いが有ったからである。イギリス、フランス、スペイン、ドイツ、イタリアの諸国は、自らの歴史的伝統と絶縁すること、従って、条件がすっかり変わったからと言って、過去に何処かで産み出してきたものを何もかも御蔵^{おぼろ}い箱にしてうような気持になれる筈がない。ヨーロッパに於いて民主政体の勝利が如何様のものであろうとも、高貴の身に生れ、祖先の華々しい勲功で飾られた国々では民主政体の勝利が大いに求められることであろう。北アメリカの多様な国民に向って、「今有る凡ゆるもの」に取って代れるような新しい文化を創始せよと勧告した際、ホイットマンが果して賢明であるかどうか疑わしい。

人類の知的進歩は思いがけぬ分離や突然の転位によって産れるものではない。いかなる変化の過程にも、吸収、混合、妥協、再結合は付きものである。氷河を例にとってみれば、氷河の動きに亀裂が有れば、それは、同時に復氷の可能性の有ることも示している。一時代、あるいは、一民族の精神はその後継者に受継られる。しかし、猶、その精神の内に、それとなく形を変え、進展した姿で、不可欠の構成要素として残留している。現代の諸々の力は、遙かな古代からもたらされた諸々の感化影響によって形成されてきた人と行動様式の中へ入り込んで行く。今の私たちは、十重二十重に混血し合った祖先から生れた複雑な産物であって、すっかり除け者にされたり、

道端に捨てられて構われないようなものでは決して無い。遺伝の不運を逃れることは如何ともすることができない。自分の先祖に係わり合いを持っていないと言う意味で独自と言うのなら、そんな個人は一人も居る筈がない。全国家が、それぞれの筋網もていつなを離れて勝手に漂い出したり、如何に火急の必要に迫られたとは言へ、眼前の諸条件に見合うような文化的理想世界を建設するようなことは不可能どころの騒ぎではない。19世紀の経験で卓絶してはいるが、民衆降臨は人間社会を統治している法規を急進的に改革しようとするものではない。言語、思考方法、言葉の伝達手段などは、依然として、現在が過去に依存せざるをえぬ動かし難い証拠である。頌詩も叙事詩も世界人工語ヴォラピュク語で書けると触れ込むような狂人は一人もいない。

以上のような推論を重ねてきた以上、文化をあらためて論ずるに当り、ホイットマンの注文が真摯に考察されなくてはならぬ。繰返し言うが、民主政体とは、現代の事実、主要なる事実なのである。政治上の一つの現象などで片付けられるものではない。宗教情熱の胚芽を宿している。現代世界が民主政体に拠り造り変えられることになっているのであれば——従って、何らかの形でこのことが起るに違いないとするなら——当然、アメリカで適用されたことは、広範囲に、ヨーロッパにも適用されることになろう。民主政体は、従来存在していた凡ゆるものにとって代れる知性のタイプを創造することで、自己が揚げ足取り以上のものであることを検証しなくてはならぬと言う先決要件をすすんで受容れる必要はない。しかし、民主政体が本質的な点で、古典古代とローマの封建制の芸術や文学と異なる芸術や文学を産出うみださねばならぬことは、真なりと認めてよいであろう。ギリシア・ローマと中世の理想が、人類の決然として踏み込んだ、現代的・民主的・科学的舞台には不向きであることは認める。斯くの如き新しい発展段階では、これまで了解されなかった着想の資料を芸術学に附与し得るだけの自分自身の構想力が保有されていると、希望に胸ふくらませ、期待を寄せることができる。

以上が、本稿で提案された課題である。その課題を、さらに、主としてホイットマンがその著作で提示している立場から考察して行きたい。

先に民衆の降臨のことについて少し触れたことがあったが、ホイットマンも民衆（人民）についての情況に論及している。「人民！ 普通の分析によれば俗悪な矛盾と反則に充滿しているわれらの大地そのものの如く、集団として見られた人間は、ただ教育でしつけられた上流階級にとっては、不快なものであり、絶えざる謎でありまた侮辱である。類稀れで、宇宙ほどに広大な芸術家肌の精神、〈無限〉によって照らされている精神、そのみが、そういう人間の多様な大洋のように茫洋たる性質に直面する、——しかし、趣味、聡明、そして教養は、大衆に対立するものであったし、いまでもそうである。海の彼方の封建的王朝的な世界——王や妃や廷臣たち、よき服装をつけ眉目みめうらわ美しき人々の住まうその世界では、極悪な非行も豚の如き低劣さも、その特殊なもの、また一般的なものも、ことごとく豊富な魅力を帯びている。しかし、この〈人民〉は、無学で乱雑で、その罪悪まで瘦せこけて無作法である」（『民主主義展望』、24—5頁。L. G., p. 502.）。繰返しになるが、ここでもやはりオルテガの大衆論の原型を見る。ホイットマンとオルテガの異なる点は、オルテガが民衆（大衆）の歴史的、社会的分析から現代人と言う類稀な人間像の出現を説くのに対して、ホイットマンは文学における「人民」の処遇の変遷に注目している。民

主義の粗野で豊饒な精神と文学との間には自ら反感が漂っていて、文学は、大勢として、人民に対し慈悲心を示し、何か慈善的な仕事をしているような態度で臨んでいる。しかし、南北戦争を凡ゆる点から体験したホイットマンの目には背光に照し出された人民の姿があらためてくっきりと浮ぶ。「この国に於てさえ、最も稀なるものは、〈人民〉についての——彼らに潜在する無限に豊富な力と才能、彼らの光と陰の巨大な芸術的な対照についての——適切な科学的評価と敬虔な理解である。彼らはその上に、アメリカでは、危急の場合に於ける全く頼しい人間たちであり、平和にも戦争にも一種の歴史的な壮観を示す。それは世界のあらゆる記録のなかに見る、紙上の英雄たちの仰々しい見本や、またどんな尊大な連中をも、遙かに凌駕するほどのものである」（『民主主義展望』、25頁。L. G., p. 502.）。それ故、ホイットマンは次の確信に達する。「クリストの出現が、人類に対して道徳的精神的領域に於て示した事実、即ち、絶対な靈魂に関しては、各個人がそのような靈魂をもっているということのなかに、〈生命の如く〉全く超越的な、等級づけの不可能なあるものが宿っている、そのため、その範囲では、すべての人間は、知性や道徳や地位やあらゆる高さや低さの区別を全然無視して、共通の地盤の上に立つということ——このクリストの示した事実は、同様に、それと別なこの領域に於て民主主義政治と符合する」（前掲書、30頁。L. G., p. 505.）。ホイットマンのこの確信が大西洋の彼方へ伝わりシモンズ^{きょうじ}の心を激しく揺さぶったのであろう。そして彼の胸奥にホイットマンの使徒たることの矜持^{きやうじ}を与えたのであろう。

デモクラティック・アートの功德 デモクラティック・アートと言う課題には考察されねばならぬ側面が二つ有る。一つは、デモクラティック・アートと呼ばれている文学も含めて、民主政体は、一体、如何なる文学を求めているかを問わねばならぬ。この問いにホイットマンは、『民主主義展望』の中で答えている。それは濁った表現で、明晰と言うにはほど遠いものだが、諸々の主要問題についての共鳴すべき思考力に富んだ答えをなしている。第二に、そんなことは、まだ、古典的・封建的形式及びそれらの派生的形式にも確立されてはいないのだが、民衆の手によって、芸術家へ供与さるべきは如何なる要素であるか、と問わねばならぬ。その思索的エッセイにおいてではなくて、詩の題名或いは詩に施した註によって自分で選定した大量の想像的な文書の中で、ホイットマンは私たちに、この第二の問いに対する答を示そうとしている。以上の二点についてのホイットマンの返答は暫らく先送りすることにして、その間に、百年前浪漫主義運動の惹起した急進的改革のことに立ち戻ることしよう。陳腐な障害を排除したことに思いを致し、将来の再建についての私たちの願いのかかっている獲得された許りの新しい基盤を検討しなくてはならぬ。

スタイルにまつわる煩雑な仕来りや正面切って扱わねばならぬ主題から解放されて、——きざいで盲滅法な反動熱から解き放たれて——貴族統治と宗教伝統に左右されることも無く——誰もが近代科学のお陰で知識を持つようになり、新しい政治観に依って個人に参政権が認められるようになり——芸術家は、自分で解釈したり、再構成しなくてはならなかった人物や事物で織りなされた素晴らしい世界と直^{じか}に対面する。素直な眼で初めて見た自然全体、社会階級制度や階級差別から初めて解放された全人類が芸術家の共鳴を呼び寄せる。今や芸術家の心に変化^{きざ}の崩しが見え始めた。素朴な人の心に畳み込まれていた美、神々しさ、そして最も身近かな物が彼の五官の前

に置かれている。さりげない佇いの醸す張りつめた雰囲気，凡ゆる努力の傾けられたものに具わる気品の良さを芸術家は五官で感じ取っている。愛は田舎屋の神々しいほどに素晴らしいもの、王の居間のそれに少しも見劣りのするものでないことに芸術家は気付く。タソーの「アミンタ」やガリニの「パストル・フィド」に見られる思い上がった押し付けがましきは少しも無くて、男女を問わず各人の胸底には神の在りますことをあらためて知る敬虔な気持，それが愛なのである。フロリゼルやペルディタを魅力的に見せるために，二人を変装させて王子，王女に仕立てあげる必要はもはや無くなった。ダフニスやクロエの話に亡き子供たちのゆがめられた結末を書き添えて，富豪の両親に嫌な思いをさせる必要もない。英雄崇拜はアキレスの幕屋を出る。騎士制度は武器をつけた瘦せ馬から下りる。忠誠心が王家に対する穢れ無き献身では無くなったかに見受けられる。情熱的交友関係はピュラデスの兄弟愛やペリトウスの熱き抱擁から離れてゆく。これらの美德のどれ一つとして私たちには失われていない。それどころか，どこにでも，それらの美德の有ることが判る。過去の遠いところへ追いやったり，特権階級特有の持物と見做さなければ，それらの美德は私たちの身近に在る。危険な鉄橋を，夜機関車を運転して渡る機関士，救命艇の乗組員，炎に囲まれ今にも崩れそうな家に果敢に立ち向う消防隊員，これらの人たちは，英雄的な点では，クレテの迷宮に屯する怪物ミノタウルを捕えようとするテセウスに，聊も引けを取らないことが判る。さらに，女性とか弱きものを思いやった騎士道，原則と道義の為に捧げた厳粛な自己犠牲，人々を兄弟愛で結びつけた友愛，悲劇へ向う情熱の発作，天界から人間へ降り注ぐ美，これらのものについても同じことが言える。これらの素晴らしい美德は遙か彼方，古代の寓話か模糊たる中世伝説の中のことだと思われていた。ぎらぎらの甲冑に身を固め，羽根飾りや拍車を着け，高貴な出生の印，背光をまとって，それらの美德は私たちの幻想の世界に姿を見せたものである。今では，わが家の玄関，大通りそして辺りの野原で，そのような美德を見かける。逆の立場から言えば，宮廷や王族の人たちの抱えている吝嗇，卑劣に，もはや眼を瞑らず正視するようになっていく。ヴァロア宮廷の野卑，チャールズ二世宮廷の俗物根性，摂政官の破廉恥，所謂善良なる社会に，多少とも，絶えず蔓る女性への侮辱，不誠実，不実，これらのことにも私たちは，もはや，眼を閉すことをしない。

以上述べたように，人生に宿る高貴でしかも愛すべき美德，純粹芸術が把握せねばならぬ美德を再確認しようとする傾向が広まって行くのは，一部は，民主政体と言われるもののお陰である。しかし民主政体なる語には，普通その語の意味と思われているより，遙かに豊かな含みがある。新しく，しかも遙かに深遠で宗教的な，人類の見方，何百年と続いたキリストの精神の時代が終り，徐々に勝利が見えて来たこと，外形，外観を突破り，その彼方に在る事物の真理と精髓を突止める能力が高まったこと，以上のことが，単なる言葉以上の意味として Democracy には含まれている。神々しきもの，神は，自然従って人間の心身の中に内在していることが確認される。自然や人間の精神，母体の外に在るのでなく，外部から創造的要素として孕まされたとか，ある単一の個体の中で肉体となった訳ではなくて，到るところ，そして凡ゆる物の中に，どこどこまでも滲透し構成し尽して止まぬものとして内在具有のものなのである。以上のことがデモクラシーの哲理である。そして科学がその哲理を産出すことに貢献した点も決して小さくはない。

とにかく，古色蒼然たるテーマを放棄せよと言ひ募る必要はない。私たちがそこからやって来た，あの遙かな過去の最善のものへ私たちを結び付けている紐帯を，一体，どうして断ち切ろう

としなくては行けないのか。私たちが機関士にもはっきり英雄崇拜を認めたからと言って、アキレスは詩や彫像の適切な主題になることを止めてはいない。愛しの騎士たち、フローラ・マクドナルド、ペリトゥス、ピュラデス、コペテュア王、バード・ヘレン、これらの人たちは今も踏み止って、それぞれの力の栄光、優雅、魅力を発散している。他人が得をしたからと言って、この人たちは何一つ失うものは無い。騎士制度、忠誠、友愛、愛、その作品を賞讃すべきものたらしめている悲哀、それらのものが、その名が名声と言う銀のトランペットで吹聴されたこともない威勢のいい男女に知れ亘っていることは誰もが承知しているからと言って古代の英雄は何一つなくするものはない。

これまで、デモクラティック・アートから期待されてよい美の領域の広がりについて言及されてきた。しかし、軽く触れただけのことである。そのことで、別して民衆のものである、無限の多様性をもった好ましい形式を発見できるようになるであろう。社会階級と高貴な出生が良い顔立ちの専売権を持っている訳ではない。社会的諸条件が、高貴な出生の人たちには、或る一定の美の範囲以上には美の表現ができないようにするとも考えられる。良き社会とは詩になる材料を何一つ提供しない社会であるとゲーテは定義したかったのであろう。この矛盾を彫刻芸術に当てはめて、磨きあげられた紳士と淑女は彫刻にも絵画にも最善の材料を提供しないと言って構わない。夜会服や舞踏会衣装を身につけた人たちが芸術の王国へ入ることはどんなに難しいことか。日常行われるいくつかの仕事には、それぞれ固有の美しさが有る。その点を追々明らかにして行く。大鎌を振っている時の草刈農夫の美事な身熟し、鉄床に過まらず槌を打下す時に撓む鍛冶屋の筋肉、腰に確りとベルトを締めた農夫の屈み込んだ姿、穀竿を振っている時の、振りあげた農夫の腕、波に立ち向おうとする緊張が生む漕ぎ手の弾力、鞍に跨っている騎手の手綱捌き、登山家のゆっくりした振り子のような足運び、糸を紡いでいる女の子、水瓶を頭にのせて運ぶ娘、紐に麻布を懸る女、トイレの掃除に追われている女、何れもこの類のモチーフ、——この調子でリストにすれば延々と続く。何故なら、どのような商売や職業にも多少目立つ特異性があり——出来上がった仕事からは、それではなくて叶わぬ特別に優雅な風合が漂うものだからである。これまでの時代の芸術家たちはこの真理を全面的に無視することはしなかった。事実、彼等は、ここで示された線に沿って、絵画上の示唆を自分で旨く利用しようと手薬引いて待っていたのである。それでも、芸術家たちはそれらの動因を、主に、さらに重要なテーマへの付加物として扱い、遙かに高邁な主題に従属させたのであった。従って生のこのような側面は、それに応しいだけの注目を集めなかった。人間の勤勉さの中に流れる美の蓄積が、僅か部分的にのみ、展成してきただけのことである。デモクラティック・アートの職分はその豊かな美を存分に進展させることである。時は来れり、今こそ高貴にして美しき民衆の素質がそれ相当の芸術的動機の中で卓越した立場を主張する。

芸術家が自らを民衆との本来の関係につかせるべきだとするならば、芸術家には根気よく果さねばならぬ課業が有る。漠然と考えられているように、民衆は芸術家の標準を低下させるからだというのではなくて、民衆は真の品位を表現するのが容易でなく、自分たちの鋭敏な感覚及び穢れなき趣味を満足させるのが難しいからなのである。

この課題解決には過敏になりすぎるほどに手を尽さなければ危険である。求められているのは、単純、率直な情感、広量、透徹した共鳴、鋭敏でしかも敬虔な好奇心、宗教と結び付いた、事実

に対する科学的態度である。純理論的或いは教訓的たれと言っているのではない。奨励と恩着せがましきは、この際、悪の最たるものだ。トルストイの精神が、若しそれが新しい聖霊降誕祝日へ貶められることになっても、デモクラティック・アートの為^{ため}に世界を備えてくれたことになるであらう。

凡ゆる事柄にも増して、中産階級の生活観が超克されねばならぬ。体面、悦楽、穩健、体面を保つこと、じりじりと火傷を負う社交の階^{きざし}を一段一段昇って行くこと、礼拝堂か教会か、二輪馬車にするか四輪馬車か、銀行の収支勘定を次第に良くして行くこと、家名に「殿」が付いたり、釘穴に赤いバラを挿したりすること、仮令追越すことは出来なくとも、隣と常に相並ぶようにしようと確り気構えをすること——およそ以上のことは、どれ一つ取っても、仮令何処へ行こうと、中産階級であることの特徴を表わしているもので、それぞれそれなりに立派なことである。民衆がこのような美德を身に付けていれば言うこと無しであった。ところがブルジョワにはそれなりの欠陥がある。それは確りと取り除かれなければならぬ——意欲的に親しく交ろうとしないこと、僚友たる素質を持ち合せていないこと、所謂劣者を見下げる性癖、手作業を輕蔑すること、道徳を偏見や信条と混同すること、教条や互いに異った宗教用語の毒気を振り播^まいて宗教を封じ込める性向、色々な意見を頑固に受け付けない、等々目白押しである。俗物根性と形式主義、何れを探るにせよ、それらが中産階級をその髓まで侵しているのである。自己正当性、自己中心的態度それに自己欺瞞の淺智慧が中産階級を蝕んでいる。このように鑿^{ちりば}められた諸々の罪惡から人間の魂を救い出し、さらに靈妙な天界へ上げなくてはならぬ。文人、芸術家は、自分が、その最も高貴なる意味での民主政体向きのものであることを進んで明す人なのだから、独りよがりの自我、人工的環境、崩れゆく封建制などの醸し出すこの世の雲霧から抜け出さねばならぬ。身をふり解^{ほど}き、あらためて自由を掲げること、それが文人、芸術家の特權である。言葉の態や法、形式の理想を見付けるのが文人、芸術家の職分である。しかも、そうすることが、そのまま、非科学的な、解釈の規準から、従って、人類共々、廢退間近の階級差別から、自然が解放されることに通ずる。

シモンズにおけるデモクラティック・アート模索の旅は、この辺りで漸やく、行手に、仄明^{ほのあ}かりが見えてきたようである。その二条の微光の一つは、デモクラティック・アートの目指す文学であり、他は、その目標に向う文学者に、如何様に、どれだけの状況が約束されるか、新しい文学の立地と可能性の問題である。第一問に対する解答は『民主主義展望』の中に、第二問についての解決は『草の葉』とホイットマンとの格闘そのものの中に約束されている。

ホイットマンは意氣軒昂とアメリカ讚歌^{そらん}を誦^{よみ}じ、文学の指標を示す。「されば、何時に变りなく、世界を導くのは、一国の個性でなくてはならぬ。その指導者たるべき人が何人であろうと疑念を挟む余地などあろうか。真に、変ることなく美事に、世界を導き来り、導き得るものが在るとすれば、こよなく偉大にして、独創、不屈の、かの靈を差し置いて外に在りえぬことを銘記しておかなくてはならぬ（この靈とは——『民主主義展望』では、別名を文学^{しき}と言う）」（L. G., p. 535.）。この文学の靈性からホイットマンがひとたび文学の現状に眼を遣れば頻りに自責の念に打たれる。「われわれの天才また有能な作家や演説家のなかで、この人民に眞実話しかけた人間、彼らのために一つでもその姿を描き出す作品をつくり、彼らのもつ中心の精神とさまざまな特質——その最高の区域ではなお全然顕揚されず表現されていない、それら特質を吸収した人間は、ほとんど

一人もいないことを感じて、私は失望と驚きをもつのである」（『民主主義展望』、42頁。L. G., p. 512.）。この文学の靈性の發揚を妨げているものは何なのか。ホイットマンの指摘によれば、それは、「淳朴にして、^{けが} 理知に汚されていない良心」の稀薄乃至欠落に外ならぬ。まるでイポリト・テヌカハンティントンの口吻を思わせる、この辺りのホイットマンの論調は洞察に溢れ、説得力に富んでいる。文明と教育の余慶に浴し、増上慢に^{のぼ} 逆上せあがり、自ら省みることを忘れた現代人が、今、自己の瑕瑾に気付くことがなければ、未曾有の悲惨に^{さら} 曝される。その危難がアメリカの行く手に立ちはだかっている。今、アメリカに求められているものは、「淳朴にして理知に汚されぬ良心」である。ホイットマンは、この良心こそは、萬古不易の真正な規準であり、それ故、時代、民族を越えて凡ゆる個人に適用さるべき鉄則だと言う。若し、そのことに気付くことがなければ、アメリカ人も一個の精神的不具者に終って了うであろう。西欧世界の男女の個性を支えているのが、「その、あらゆるものに滲透する宗教性」にのみあることを思えば、今立つアメリカの危難は超剋されねばならぬ。アメリカも、また、その宗教性を自己の立つ^{せきつい} 脊椎としなくてはならぬ。

シモンズが「デモクラティック・アート」4章冒頭で、その基本課題を二つに整理したことは先述の通りである。その際、シモンズは意識的に、この二つの課題に論及することを避けたように思われた。その理由が少しずつ、この辺りから明らかになって行くような気がする。「デモクラティック・アートの求める文学」、この課題に対する解答は『民主主義展望』の中に在るとシモンズは言った。そして、その中で提示されたホイットマンの方程式は極めて明解であった。一国の個性＝こよなく偉大にして独創不屈の靈＝文学、と言うのであった。そして、今、その方程式の解析はこのように示される。「個人の人格はこのような靈を融合し、また愛護する。私は言いたい、個性の完全な、純潔と孤独のなかにのみ、宗教の精神性は初めて積極的に現出すると。ここでのみ、そのような条件に於いてのみ、冥想、敬虔な恍惚、天かける飛行は行わる。ここでのみ、あの神秘、永遠の問題、どこから？ どこへ？ という問題と、交通することができる。独りになり、個性に徹し、その気分ひたる時——靈は現われ、あらゆる声明・教会・説教は、蒸気の如く溶け去る。独りになり、沈黙した思想と畏敬、そして憧憬をもつ時、——内部の意識は、魔術のインクでこれまで眼に見えず書かれていた文字のように、その不思議な線条をわれわれの感覚にまで輝かしく現わしてくる。聖書は伝達し、僧侶は説明する、しかし敬神の純粋な空気の中に入り、神聖な層にまで達し、言い難きもの〔神〕と交通することは、ただ、その人の孤立した「我」の音もなき活動にのみ許される」（『民主主義展望』、57頁。L. G., p. 521.）。多少牽強附会の嫌いはあっても、この場合も、やはり、靈は文学に置き換えることが可能であり、その方が判り易い。ホイットマンの言う「個性に徹した靈」とは、新しい宗教に直面した人を指していることは勿論であるが、同時に、アメリカの待望している文学と文学者像をも含んでいる。そう言えば、ホイットマンの「自然」概念にも同じような多重性が認められる。曖昧模糊の印象は拭い切れな

アメリカは、自分自身の如く、大胆で、近代的で、すべてを包容する、宇宙的な詩を要求している。その詩はどんな点でも科学や近代を無視してはいけぬ。科学と近代によって自己に靈感を与えねばならぬ。それは過去よりも未来に視線を向けねばならぬ。アメリカの如く、

それは過去の最大のモデルからさえも自己を脱離せねばならぬ。そしてそれらモデルに礼儀を失わぬと共に、自己自らと、自己の民主的精神の製作品のみに、完全な信仰をもたねばならぬ。アメリカの如く、それは、人間が自己に対してもつ神聖な誇りを旗印として先頭に立て、どのような難局にもそれを掲げておらねばならぬ（この誇りこそは新しい宗教の根本的な基礎なのである。）。「民衆」は、一般人間が、優越者を認め、卑屈な態度で、うやうやしく頭を下げている詩を、既に長過ぎるぐらい聴き続けてきた。しかしアメリカは、そのような詩には耳を傾けない。毅然として、堂々として、自尊に満ちたもので詩歌はありたい。そうすれば、アメリカは喜んでそれに耳を傾けるだろう（『民主主義展望』、80頁。L. G., p. 534.）。

先述の如くシモンズはデモクラティック・アートの抱えている課題二つを提示し、その解決の所在、手続きまで準備しておきながら、敢て、その実行を保留した。古典主義と浪漫主義の相剋から生れた新しい文芸の地盤を確認、整序するためであった（E. S. S., II, p. 40.）。その過程で、^{おのずか}自ら、Democracy, Democratic Artの内包量、多様性が、少しずつ明らかになって行く。「芸術家は、自分で解釈したり、再構成しなくてはならなかった人物や事物で織りなされた素晴らしい世界と直に^{じか}対面する」と、さりげなくシモンズが語れば、開かれた文芸の地平を見遣る、喜びに溢れた詩人の姿が眼に浮ぶ。文体上の問題と言えはそれまでのことながら、ホイットマンの文章は確かに錯雑たる印象を免れない。「ホイットマンは、彼を公正に扱おうとしている批評家たちに無理難題を吹きかける。その無^{ぶごま}様な言葉遣いやぎこちない文章に出会うとホイットマンの思想の広がりや崇高な構想力を正当に評価することなど到底できない」（*op. cit.*, p. 47.）とシモンズの筆誅は厳しい。

シモンズ『デモクラティック・アート』の敷衍、義解も、その前半4章で^{ひとま}先ず終る。終章の結論を冒頭に据えて、それを逐次解析する手法が果して有効であったか、やはり疑問は残る。ホイットマンがイギリスの文壇の片隅に残した足跡『デモクラティック・アート』を、その筆者であるジョン・アディントン・シモンズに重点をおいて、彼の伝記、書翰集から、その成立の経緯、内容を解明しようとする試みも未完のままである。

当然のことながら、「デモクラティック・アート」の後半及び、その全体に亘る論究と、シモンズの文芸評論での位置付けと意味については、早急に、続稿が用意されねばならない。それにしても、ホイットマンとシモンズを論ずる場合、決まったように CALAMUS, (L. G., pp. 97-114.) であり homosexuality でなくてはいけないのか。グリーンズパンもレノルズもそれ以外に語ることを知らぬかに見受けられる。『シンボル形式の哲学』（エルンスト・カッシーラー）の援用が^{おお}大形と言うのなら、既に提唱されている、神・人間・自然の三位一体説（ホイットマン）から、根本的な説明原理が得られないものであろうか。

参考引用文献書目

- 1 ホイットマン詩集 草の葉、全3冊（岩波文庫）、杉本 喬・鍋島能弘・酒本雅之訳、昭和44年5月16日、第1刷。

- 2 ホイットマン自選日記，全2冊（岩波文庫），杉本 喬訳，昭和44年10月20日，第2刷。
- 3 ホイットマン著『民主主義展望』（岩波文庫），志賀 勝訳，昭和29年11月20日，第2刷。
- 4 ウィリアム・モリス著『民衆の芸術』，中橋一夫訳（岩波文庫），昭和28年4月5日，第1刷。
- 5 Walt Whitman, *Leaves of Grass and Selected Prose*, Rinehart Editions, Rinehart & Co., N. Y., 1949.
- 6 Horatio F. Brown, *John Addington Symonds: A Biography*, Compiled From His Papers and Correspondence, Second Edition, Smith Eler, & Co., London, 1903.
- 7 Phyllis Grosskurth, *John Addington Symonds, A Biography*, Arno Press, N. Y., 1975.
- 8 *The Memoirs of John Addington Symonds*, Edited and introduced by Phyllis Grosskurth, Hutchinson, London, 1984.
- 9 *The Letters of John Addington Symonds*, 3 vols., Edited by Herbert M. Schueller & Robert L. Peters, Wayne State University Press, Detroit, 1967.
- 10 John Addington Symonds, *Essays Speculative and Suggestive*, 2 vols., AMS Press, N. Y., 1970.
- 11 David S. Reynolds, *Walt Whitman's America: A Cultural Biography*, Alfred A. Knopf, N. Y., 1996.
- 12 *The Cambridge Companion to Walt Whitman*, Edited by Ezra Greenspan, Cambridge University Press, 1995.
- 13 *The American Spirit, A Basis for World Democracy*, Edited by Paul Monroe & Irving E. Miller, World Book Company, N. Y., 1918.
- 14 Ernst Cassirer, *An Essay on Man: An Introduction to a Philosophy of Human Culture*, Doublday Anchor Books, N. Y., 1954.

付記。本稿所収二葉の写真は、上記文献中、9、12から拝借した。